

LOVE

メイヨー・クリニック・メソジスト・ホスピタルでの30日間 (その3)

田中 美智子

(前回まで)

1989年3月6日、私は米国ミネソタ州のメイヨー・クリニックで食道と胃切除手術を受けた。食道がんだった。たった一人の闘病と、手術の4日後に始まったスパルタ式のリハビリに歯をくいしばった。それができたのは医師・ナースとの間に結ばれた信頼関係によるものであった。インフォームド・コンセントの重視、明るいナースたちには常に励まされた。30日後に退院。ドクターは「あなたはもう病人ではありません」とおっしゃった。

責任あるナースの仕事

ナースのことで、日本と違うなという印象をもったことといえば、次のようなものがあります。それは例えば、色は白に限られるものの、いわゆる看護帽も含めユニフォームが無いこと。もっと大切なことでは、検査のための移動には運搬専門の男性が配置されていること、車椅子のためにも専門の男性が当てられていること。肺炎の時に毎朝背中を叩きに来てくれるのが専門のセラピストであること、毎朝6時の採血もスペシャリストであることなどです。それから、退院のとき荷物をまとめて車まで運んでくれる係もあります。すなわち、日本で通常看護婦さんの仕事としてとらえられているいくつかの仕事は、それぞれの専門の人が従事しているのです。このことは、ナースが本来行うべき看護という仕事に最も集中して深く関われるということにもなるのだと思います。

私の退院日を決定する際、ドクター・ペインとヘッド・ナースが揃って部屋に来られたのですが、ドクターはナースから見た私の入院生活、そして退院後の治療を一人でこなす自信ができているかどうか、彼女の意見をとても重要に考えて総合判断を下されたようでした。その結果、最終的に退院日の決定を行ったのはヘッド・ナースのミス・ブラウン。ドクターからの信頼をもとに、ナースの責任ある立場が認められているということなのでしょう。ドクターとナースがチームとして、常に同じ態度で患者にあたること



たなか・みちこ

1934年、東京生まれ。東洋英和女学院より、アメリカ・イリノイ州ノックス大学へ留学し、57年、同大卒業。主婦。

がいかに大切か身に沁みました。

ここでもうひとつ、話させていただきたいことがあります。それは、私が受けた数多くの検査で本当にありがたかったことについてです。胸部レントゲンだけでも15回も撮りましたから、CT等を含めるとかなりの回数になったと思います。その都度、検査室までストレッチャーで運ばれたのですが、枕や毛布の数をこちらが望むとおりにひとつひとつ気づかってくれたのです。私の場合、45度の傾斜でベッドに寝ていましたから、たとえ数分でもそれと同様の姿勢になれる三つの枕に上半身を支えられたことは、非常に楽だったのです。また、アポイント制なので待たされることはなく、外来の検査とは部屋が違うのでパジャマ姿でも安心していられるというのも、気分的に助かりました。検査は、まずドクターや技師からどんな検査をするのか、どの位の時間がかかるのか、という再度の説明の後始められます。途中で気分が悪くなったら手を上げるよう指示されていますが、それをしなくても半分済んだところで合図が入り、後半も頑張るように励まされるということもありました。検査の辛さ、不安さの中には孤独感も含まれているわけですから、このような配慮は患者にとって非常に大きな救いとなりました。

きめ細やかなケアー

どうしても、医師の先生やナースの方々のことでの感



病院の中の教会



採血待合室

想が多くなってしまいましたが、最後にメイヨーがもっているケアのきめ細やかさは、まだまだたくさんあったことも加えさせていただきます。食事はいくつかのメニューの中から好みのものを選べることで、毎朝生活必需品をのせた押し車が病室を訪れてくるので身の回り品に不自由しないこと、時計を兼ねて大型テレビが天井からぶら下げられていること、ボランティアの人が来て病室に好みの絵を飾ってくれること、時々牧師や精神科のドクターが訪れて励ましてくださること、各ベッドに電話が配置されていることなど。この電話は、こちらからかけるのはロチェスター市内に限られますが、受けるのはどこからでも24時間可能で、私には特に長距離の使用が許可されたので、知人や友人の励ましの声が大きな励め・支えとなりました。

直接ケアに関わることはありませんが、病院のメンテナンスが実に見事でどこへ行ってもチリひとつありません。病院はもちろん全ての場所が毎日掃除されているということでした。病院の中には、何カ所もホテルのロビーのような家族用待合室があり、本や雑誌が置かれていて、看病にあたる家族への温かい配慮が見られました。また、英語を話せない患者には、病院の負担で通訳のサービスが用意されています。事前に頼むとほとんど、どここの国語でも大丈夫とのことでした。ご参考までに申し上げますと、私の場合、請求書はA4判14ページにわたり、その日その日の明細がびっしりタイプしてありました。ですからこれを見るだけで、受けた治療と看護の内容が一目瞭然というわけです。ちなみに私は、かけていた郵政省の簡易保険二口と疾病つき生命保険に思いがけず助けられるという結果になりましたが、日本式に“お礼”といったようなことは一切必要ありませんでした。

ドクター宅への訪問

帰国後も、半年ごとの検査の結果をドクター・ペインに

はご報告しておりますが、いつも必ず長い励ましのお手紙を下します。一昨年の10月には、ロチェスター訪問の機会がありましたので、すでに引退なさったドクターを娘と一緒にご自宅に訪ねました。応接間でその後の様子をいろいろ聞いて下さり、また励ましの言葉をいただき、あらためて感慨深い気持ちになったのですが、帰る際、背の高いドクターが私の娘の肩をしっかりと抱き、私の方をご覧になって「お孫さんの顔を見ることが出来ますね」とにこやかにおっしゃった時には、不覚にも涙が溢れました。この時の涙と、その向こうににじんだお庭の雑木林の美しい紅葉を、私は生涯忘れることはないと思います。

その後の人生を生きる

昨年3月6日で手術から満5年が過ぎ、一応完治したことになります。しかし、後遺症は依然残っていますし、毎日の健康管理はなかなか大変です。ただ、目の前の現実をしっかり受けとめ、「できるだけ普通の生活を」とおっしゃったドクター・ペインのお言葉を心がけています。体調が悪かったり、いろいろ困難にぶつかれば、この体でどうして……と落ち込みます。夜中に一人泣きわめくこともあります。体力が続かないとき、ふと自分のハンディを思い、人生もういいとやけになったりもします。そういう時はいつも私に力を貸して下さったメイヨーの方々のお顔を思い出し、気力を取り戻すようにしています。

思えばあの時、私という人間にかかわり、心配し、ケアして下さる方々の存在がある限り、どこまでもついていこうと決めていました。そしてこの思いが入院中のことだけでなく、その後の人生を生きる力につながったのです。この5年間、はからずも数多くの方々から愛をいただき、頑張ることができました。与えられた恩寵に応え「私は走るべき行程を走り尽くした」と、最後の時に言えるような日々を送りたいと、いま切に念じております。(完)